

事案名	湯河原町の事案（神奈川県 14 - 3）
フォローアップ調査資料	<ul style="list-style-type: none"> ・『西さがみ庶民史録』1984年第8号〔1〕 ・「本邦化学兵器技術史」〔2〕 ・証言（元第6陸軍技術研究所出張所長の証言）（昭和48年調査）〔3〕 ・「旧軍毒ガス弾等の全国調査結果報告（案）」資料1の2〔4〕 ・『西さがみ庶民史録』1991年第27号〔5〕 ・証言（旧軍属の息子の証言）〔6〕 ・証言（住民の証言）〔7〕 ・「『旧軍毒ガス弾等の全国調査』のフォローアップ調査について（回答）」平成15年10月23日〔8〕
追加資料	<ul style="list-style-type: none"> ・旧軍毒ガス弾等についてのアンケート調査結果（元第6陸軍技術研究所吉浜出張所軍属）〔A1〕 ・『西さがみ庶民史録』1984年第8号〔A2〕 ・「旧軍毒ガス関係資料について」平成16年2月17日〔A3〕 ・「『旧軍毒ガス弾等の全国調査』のフォローアップ調査について（回答）」〔A4〕 ・『平成16年度国内における旧軍毒ガス弾等に係る情報収集及び取りまとめ業務報告書』〔A5〕 ・証言（〔7〕と同じ住民の証言）〔A6〕 ・『東京新聞』・『神奈川新聞』・『相模新聞』・『伊豆毎日新聞』平成16年10月28日〔A7〕 ・「国内における毒ガス弾等に関する総合調査検討会（第8回）」資料9〔A8〕
平成15年度フォローアップ調査報告書の要約	<p>昭和19年に第6陸軍技術研究所は、民間工場を接收して神奈川県吉浜（現湯河原町）に出張所を開設し、毒ガス（イペリットやホスゲン）の動物実験や毒物管理並びに治療法の研究を行った〔1〕〔2〕。なお、戦後、保有した毒ガスの若干を周辺の海域に投棄したとされる。なお、戦後、同出張所の廃材に触れた子どもが被災したとの証言がある〔7〕。</p> <p>生産・保有情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・元第6陸軍技術研究所出張所長の証言によれば、「終戦時に、第6陸軍技術研究所吉浜出張所はイペリット・ルイサイトの鉄甕20個・ドラム缶30缶を保有していた」と記載されている〔3〕。なお、「旧軍ガス弾等の全国調査結果報告（案）」にもこれと同じ記載がある〔4〕。

廃棄・遺棄情報

- ・元第6陸軍技術研究所出張所長の証言によれば、「上記保有量のうち若干を海中に投棄し、大部分は第6陸軍技術研究所本部に搬送した」としている〔3〕。
- ・元第6陸軍技術研究所出張所関係者の証言として、「昭和20年8月15日夜に、陸軍の舟艇から直径30cm長さ1mほどの鉄製筒型容器7～8本を、真鶴岬と初島を結ぶ洋上に達したときに海中に投棄した」と記載されている〔1〕〔5〕。
- ・証言によると、証言者の父親が軍隊で毒ガスの研究をしており、終戦時に米軍が来る前にトラックでホスゲンやイペリットを運搬し、湯河原の沖合2～3kmに投棄したと聞いた〔6〕。

発見・被災・掃海等処理情報

- ・住民の証言として、「4～5歳頃(終戦後)に、毒ガス工場(第6陸軍技術研究所)近くで、兄と仲間の子供達5～6人で毒ガス工場の廃材に座っていたが、数日後、右足に火傷のような症状(5～6センチ)が出て、さらに肝臓が冒され体全体が黄色になってしまった。兄は熱を出した程度であった。心配した父親が、研究所にいた元軍医に相談したところ『イペリットの被害で火傷は最後まで残る』と言われた」。その後は吉浜にあった病院に通院したが肝臓はなかなか快復せず、百日咳を引き起こしたりして苦労した記憶が鮮明にある。この件では現在は病院には行っていない。「火傷(ケロイド)の痕は数年前に完全に消えてなくなったが、右足のだるさはいまだに続いている」と記載されている〔7〕。

現在の状況

- ・吉浜海岸は、現在国道135号線が走り、海水浴場となっている〔8〕。

<p>新たな情報</p>	<p>生産・保有情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・元第6陸軍技術研究所軍属（各ガスの効力試験を行っていた）は昭和19年4月から8月下旬まできい剤（ボンベ）、あお剤（瓶・缶）、ちゃ剤（瓶・缶）を保有していた。量は不明と記している〔A1〕。 <p>廃棄・遺棄情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「終戦時に海洋投棄のためにイペリットを運び出した港は真鶴港」とのことであるが、福浦港から上陸用舟艇で深夜ひそかに捨てに行ったとの証言もある〔A2〕。 ・元第6陸軍技術研究所軍属（各ガスの効力試験を行っていた）はアンケートに毒ガスは「昭和19年8月下旬千葉県習志野に移送後不明」と記している（その毒ガスは、きい剤、あお剤、ちゃ剤で量は不明と記している）〔A1〕。 <p>その他情報</p> <p>(1) 地歴について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第6陸軍技術研究所の吉浜出張所は、民間会社の工場を昭和19年4月に接收して開設した。終戦後、土地・建物の返還を受けた民間会社は操業再開を断念したとの情報がある〔A3〕。その後昭和46年に町がその土地を購入し、診療所が建設された〔A4〕。 ・第6技術研究所吉浜出張所跡は現在、公園、保育園、住宅となっており、広い範囲で土地の改変が行われている〔A5〕。 <p>(2) 第6陸軍技術研究所吉浜出張所に由来すると思われる廃材に触れて被災したとされる証言情報について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毒ガス弾等との関係は不明だが、「5～6歳の頃、東海道線の湯河原駅付近で、駅に到着する戦死した兵士の遺骨を迎える遺族の葬列を廃材に座って眺めていたときに被災した」、「この廃材は、民間会社の店の前に、幅2m弱の用水路のような小川に橋をかけたような状態でピラミッド状に積まれていた。廃材の種類は様々で同じ物はなく、朽ちたような色をしており、その分量は家一軒分位だった」との証言情報がある〔A6〕。 ・民間会社は、当時から場所を移すことなく、現在も同じ場所にあった。被災した情報のある、廃材が積まれていた橋がかかっていた用水路のような小川は、現在は民間会社の社屋の前では暗渠となり、歩道や道路として整備されていた〔A5〕。 ・元第6陸軍技術研究所関係者によると、「敗戦と同時に六研で使っていたさまざまな資材はまたたく間になくなってしま
--------------	---

いました。イペリット容器の置いてあった角材もなくなってしまいました。それに手を触れた子供が火ぶくれになり、医者にかけこんだところ、これは普通の傷ではない、なにか薬物による傷であることがわかって大騒ぎになりました」と証言している〔A2〕。なお、同証言者による第6陸軍技術研究所の敷地図には、「ガス貯庫」の位置が示されている〔A2〕。

(3) その他

- ・「湯河原町東部の宅地造成地で、旧日本軍の毒ガス瓶に似た不審瓶が見つかった。瓶は球状で直径7センチ、内部には透明な液体が3分の1ほど入っていた。22日に地元小学生が見つけた。近くの林に投げ込んだのを造成業者が目撃して、通報した」との記載がある〔A7〕。なお、環境省が実施した分析の結果、不審瓶の内容からは毒ガス関連成分は検出されなかった〔A8〕。